

まいぶんfan

向日市の埋蔵文化財の最新情報を提供します。

Archaeological Information of Muko-city, Kyoto-pref, Japan



〜長岡京の器〜

みやこの宇都波毛乃

平成二八年度調査研究成果展

うつわもの

平成28年 9/10(土)～10/10(月・祝)

会場 向日市文化資料館

休館日: 9/12、20、21、23、26、30、10/3

主催 向日市教育委員会・公益財団法人向日市埋蔵文化財センター

乃毛波都の宇このやみ

～長岡京の器～



平成27年度に得た長岡京に関する様々な成果の中で、条坊側溝から土器類がまとまって出土した左京第580次調査の成果をもとに、長岡京で日々使われた土師器・須恵器を総覧します。

I 長岡京の土器

はじめに～宴会のうつわ

宮殿の宴会に用いられた、良質な土器たちがうつわものの世界へ誘います。

1 土器の種類

長岡京跡出土の土師器・須恵器を、供膳・煮沸・貯蔵形態で区分して器種ごとに形や機能の特徴を紹介します。

2 形態の変化

代表的な食器について、平城、長岡、平安三都の土器を並べて、時代の変化にともなう形や大きさ、つくり方の違いを比較します。

3 長岡京周辺の生産地

長岡京期と同じ時期に操業していた亀岡市篠・西長尾窯跡、京田辺市松井窯跡などの須恵器窯について、出土遺物を展示し消費地である長岡京出土品との比較を行います。

II 平成27年度の発掘調査成果

会場：向日市文化資料館

京都府向日市寺戸町南垣内40-1 入館料：無料

開館時間：午前10時～午後6時（入館は午後5時30分まで）

アクセス：阪急京都線東向日駅から徒歩約8分、

JR京都線向日町駅から徒歩約15分

講演会

「古代的食器からみた桓武朝の変革」

奈良時代終りから平安時代のはじめにかけての焼き物としての食器の特徴を平城京・長岡京・平安京の出土品から整理し、桓武朝における食器文化の変革の実像にせまります。

講師 國下 多美樹氏
(龍谷大学教授)

日時 平成28年9月25日（日）午後2時～4時 受付1時から
会場 向日市文化資料館 2階研修室
定員 80人（申込み不要） 参加費無料

〈名品紹介〉 五塚原古墳出土の平安時代前期・灰釉陶器

最古段階の大型前方後円墳として注目されている五塚原古墳ですが、不思議なことに古墳が築造された時期の遺物については7回におよぶ発掘調査を通じて全く確認されていません。

墳丘に埴輪は並んでいなかったことが確定的になりつつあります。後円部の墳頂で土器をもちいた祭祀がおこなわれていれば、今後の調査で土師器片が採集されるかもしれません。

このような状況にあって、昨年の調査では後円部東側の墳丘裾から平安時代の珍しい壺が出土しました。古墳が長い年月を重ねて、後世、どのように意識されていたのかを知る手がかりを得ることができました。

ここで紹介する壺は、愛知県名古屋市東部付近に形成された猿投山西南麓古窯跡群（いわゆる、猿投窯）で生産された灰釉陶器とみられます。灰釉陶器はこの日本屈指の窯業地帯で9世紀初めに創出されました。椀や皿を中心に瓶、壺、盤などが作られ、10世紀に入ると量産化がすすみ、つくりが粗雑となり施釉の範囲も省略傾向が強くなります。

本例は短頸壺を原形にしながら、体部下半と肩部に横方向の突帯をめぐらせています。これに交差する縦方向の突帯が三方向に貼り付けられ、その上端に耳と底部に脚を付け足しています。灰黄色の釉は薄く外面全体に及び、肩部には自然釉が重なり緑灰色を呈しています。本来は蓋を伴っていたと考えられますが、すでに失われています。

この壺は9世紀後半に火葬蔵骨器として作られた、灰釉四足壺が祖形になるものと考えられます。底部に高台を付した短頸壺から三耳三足壺へ作り替えがみられることから、類例が少ない特注品である可能性もあります。

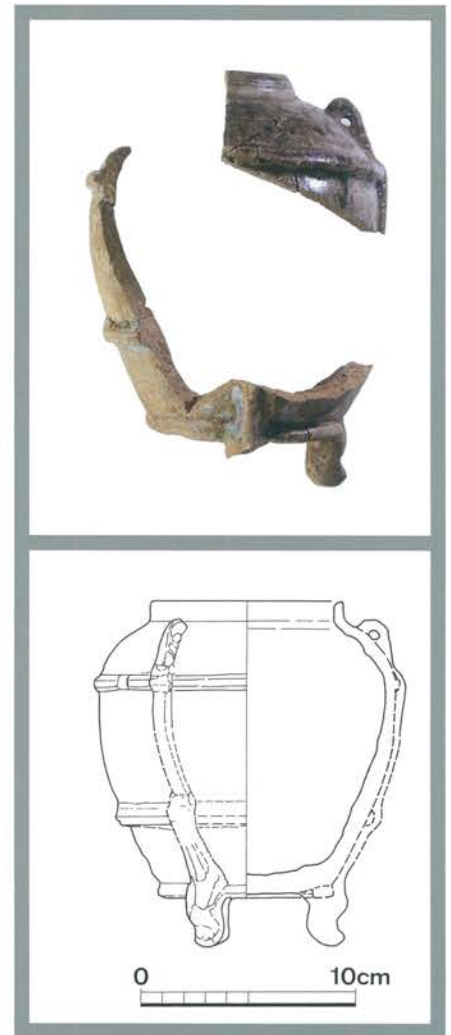
製作された時期は、10世紀代に下るものと思われま。なお、同じ出土地点からは、近江産とみられる10世紀後半頃の緑釉陶器椀も確認されています。この時期に古墳の近傍で、祭祀か埋葬があった可能性を想起させます。

古墳から北東へ約300m離れた場所には、白鳳期に創建された宝菩提院廃寺（長岡寺・願徳寺）が所在しており、わが国最古となる平安時代前期の湯屋が発見されたことで一躍脚光を浴びました。墳丘と周囲からはこの寺院と同じ創建期の軒瓦、平丸瓦のほか、方形埴輪も採集されています。古墳に隣接して瓦を用いた堂舎が設けられていたとみられ、古墳は境内地の一角に含まれていたと考えられます。また、平成26年度に実施した前方部東側の調査では、東くびれ部に接続する中世の土手状盛土遺構が見つかり、墳頂に向かう通路が設けられていたことがわかりました。

昨年の調査を振り返ると、墳丘の裾石が抜き取られた痕跡があり、そこに長岡京期の土師器皿がうつぶせにして置かれた状況を確認しています。裾石から1.5m外側には礫敷が施されていますが、それが途切れた場所で今回紹介した灰釉・緑釉陶器が出土しています。これらは、後世に古墳を再利用した痕跡とみることができま。

五塚原古墳は7世紀後半以降、宝菩提院廃寺との関わりのなかでひとびとの祈りや安らぎの空間として変貌しつつも、地域の「始祖墓」として大切に扱われ、今日まで墳丘全体が損なわれることなく守り伝えられてきたのでしょう。本品は、左記の展示会で初公開いたします。

（梅本康広）



灰釉陶器の実物写真と復原図



「葛野大堰」の現在の景観（嵐山渡月橋から一ノ井堰をのぞむ）



太秦蛇塚古墳の石室（奥壁から石室入り口をのぞむ）

13回目を迎える本年度の市民考古学講座は、京都の礎を築いた秦氏を取りあげます。現在の京都市から向日市にかけては、秦氏が残した歴史的な文化遺産が多くあり「葛野大堰」に起源をもつ桂川用水、嵯峨野の古墳、伏見稻荷大社や松尾大社、広隆寺などは現代に生きる私たちの日常に深く溶け込んだ身近な存在として親しまれています。また、平安宮内裏の紫宸殿は秦河勝の邸宅跡に建てられたとの興味深い伝承があり、太秦にある蛇塚古墳は地元で河勝の墓と語られています。

このように秦氏は、山城北部地域に拠点を置いて可耕地や居住地の拡大をすすめ、人びとの精神的な支柱となる寺社を管掌し、在地勢力と融和しながら自らの政治経済基盤を固めて新京の造営にも尽力したと考えられます。

今回の講座では、考古学・地理学・文献史学から古代豪族秦氏の実像にせまります。

- 第1回 古墳からみた秦氏の動向 7月16日（土）
- 第2回 古代寺院からみた秦氏の動向 9月17日（土）
- 第3回 京都盆地の自然と秦氏の活動 10月15日（土）
- 第4回 秦氏の足跡を訪ねて～松尾・太秦めぐり～ 10月29日（土）
- 第5回 東アジアの宮都からみた長岡京～百濟王宮～ 11月20日（日）
- 第6回 東アジアの宮都からみた長岡・平安京～唐長安城～ 12月17日（土）

※第1～4回までの募集は終了しました。

第5・6回の募集は、10月1日（土）よりFAXにて受付を開始します。募集人数80名（先着順）

会場：向日市文化資料館2階研修室 参加費：無料 問い合わせ・申込み：向日市埋蔵文化財センターまで

市民考古学講座講演会 「秦氏と古代日本 ～渡来人の果たした役割を考える～」



日 時 平成28年11月23日（水・祝日）
午後2時から午後4時 受付1時から

定 員 180人（申込み不要） 参加費無料
会 場 イオンモール京都桂川3階 イオンホール
アクセス JR京都線 桂川駅直結、阪急京都線 洛西口駅から徒歩5分

講 師 井上 満郎氏（京都産業大学名誉教授）